

斎、長崎の吉雄幸澤という。これ以後、疱瘡流行の記録は見られない。

『八丈島年代記』には、次々襲い来る災害・飢饉に加え疱瘡が持ち込まれ、餓死、病死の文字が続くが、両者は深く関係しその区別は曖昧であるとも考えられる。史料からは、飢饉で山へ牛喰ら

いに出、疱瘡流行で山へ逃げ、災害が続くと神祭を行い、飢饉で困窮の際には島民同士の合力も行われていたことなど島の暮らしの一端がうかがわれる。

(平成25年3月例会)

陶烈と日本医学界

藤田 梨那

医学の分野における日中両国のつながりはおよそ明治期から始まる。明治中期に起こった第一次日本留学ブームのなかで、多くの中国青年が日本にやって来て、近代医学を学んだ。中国の医学の発展はこれら留学生の貢献によるところが多い。留学生のなかに優秀な研究者も輩出した。陶烈はそのひとりである。京都帝国大学医学部に学び、東京帝国大学、東北帝国大学で脳研究の最前線を突き進んだ。不幸にも病気により30歳の若さで夭折したが、わずかに10年ほどの間に、神経学、条件反射、心理学、生理学、脳神経学について多くの研究成果を残した。あまりにも若くして亡くなったので、日本医学界や中国においても彼を知る人は少ない。しかし、陶烈の研究はその先進性において、日本医学史に残した痕跡は小さくない。医学史研究でその業績を明らかにする必要があるのではないだろうか。

一、日本で学んだ歳月

陶烈は1900年(M33)1月22日、中国無錫の大家の二男として生まれた。兄は陶熾こと陶晶孫である。1907年7歳の時に来日し、東京精華小学校に入学した。その後東京府立第一中学、第一高等学校を経て、1919年京都帝国大学医学部に入学した。兄陶晶孫はその年に九州大学医学部に入学した。兄弟は2歳離れていたが、中学、高校、大学は同じ年に進学した。1923年京都帝国大学を卒業したが、直ちに京大生理学教室に入り、石川

日出鶴丸教授に師事した。1925年から東京帝国大学精神科学教室に入り、三宅鉦一教授について、脳神経の研究に従事した。1925年～1927年の夏に青森県浅虫臨海実験所にて下等無脊椎動物の実験を行なった。1928年第4回太平洋学術会議に出席した。この時期から結核を患い、一時期伊豆へ転地療養をした。1930年に30歳の若さで中国広東中山大学教授となる。同年8月機材購入のため来日した際、扁桃腺の手術を受けたが、術後蜂窩織炎で急死した。享年30歳。

在日中日本医学界の友人に、林譚(大脳生理学者、条件反射研究者)、黒田源次(心理学者、条件反射研究者)、柘植秀臣(大脳生理学者)、小川鼎三(東京大学教授、脳比較解剖学者)など、日本医学界の著名な学者らがいる。またジャーナリスト尾崎秀実も陶烈、陶熾と親交をもっていた。

二、医学研究とその業績

陶烈は京都帝国大学を卒業後、石川日出鶴教授の生理学教室に入り、生理学及び心理生理学の研究を続けた。その間、ドリーシュの生気論やパブロフの心理学に注目し、翻訳と論文を多く発表している。1923年に翻訳『ドリーシュの生命論』を泰光社から出版した。1924年に雑誌「生理学研究」に論文「条件反射の実験的研究」、「統計二つ」、「心理生理学 Max Verworm 翻訳」を発表した。1925年に同雑誌に「原始芸術と原始思想 Verworm 翻訳」、「人間精神の進化 Verworm 翻訳」を発表し

た。京大時代は主に心理学の研究に力を注いだようである。

東京帝国大学精神科学教室に入ってからには主に脳神経の研究に従事した。1927-1929年の間、「言語運動と言語表像過程」（「心理学研究」2巻3輯）、雑誌「神経学雑誌」に「人脳皮質下諸神経核ノ細胞容量ニ就イテ」、「小脳皮質諸細胞ノ定量的検索」などの論文を発表した。また中国の雑誌にもエッセイや論文を掲載し、日本の医学を紹介している。1930年、雑誌「学芸」に「日本之精神病院」、「第4回太平洋学術会議生物科学組会議経過」を発表、「科学」に「浅虫臨海実験所記」、「中山大学自然科学」に「關於筋緊張」を発表した。

三、ドリーシュ生気論紹介

1923年出版した『ドレイシュの生命論』は、日本における最初のドリーシュ紹介である。この本は藤岡巖との共著ではあるが、陶烈はドリーシュの「生気論の歴史と理論」の翻訳を担当した。藤岡巖によって書かれた序文「ハンス・ドレイシュの生命論」から、彼らはドリーシュの目的論的生気論を重要視し、自然科学の機械論への反省と生命発生に対する哲学的思索の必要性を感じていたことが窺い知れる。彼らのドリーシュ生気論紹介の意図もここにあると言える。

日本におけるドリーシュ学説の紹介は1930年代に多く行なわれた。その後、今世紀初頭に米本昌平氏によって翻訳紹介され、自然科学の先端研究の領域でドリーシュの生気論は再び注目されるようになった。今日から見れば、陶烈と藤岡巖のドリーシュ紹介は草分け的な意味をもつと言える。

四、条件反射紹介と脳神経研究

陶烈は京大時代にパブロフの条件反射論に注目し、パブロフの翻訳や紹介を試みた。1924年4月、陶烈訳パブロフ「条件反射に関する研究」を雑誌「生理学研究」（1巻3号）に発表した。同年、黒田源次著『条件反射論—意識生活の生理学解釈』が世に現わされ、陶烈は早速その書評を「生理学研究」に載せた。「まさにパブロフ研究書の随一として推されねばならぬ。心理生理学に関する書物が一つもなき日本に於いて斯くの如き著書を見ることは吾等の心から快を叫ばんとする処である」と評価している。パブロフの条件反射論に対する陶烈の注目点は、心理生理学研究、定量的実験研究、高次脳機能研究である。条件反射論への関心は後に彼の大脳研究につながっていく。東大精神科学教室時代脳研究について「人脳皮質下諸神経核ノ細胞容量ニ就イテ」、「小脳皮質諸細胞ノ定量的検索」と多くの脳研究関係の論文を発表している。またその研究の集大成ともいえる著書『脳之研究』は1939年に兄陶晶孫の手によって出版されている。

日本の条件反射学の専門家黒田源次、林謙はみな陶烈と親交があった人物である。従って、陶烈は黒田源次、林謙と並んで日本におけるパブロフ条件反射学紹介の最初の人といえる。また脳研究については、小川鼎三氏が「陶烈の人脳の皮質下諸核の細胞容量に関する研究は驚嘆すべき豊富な内容をもっている。彼こそ世界の脳解剖学で第一線を進んでいた学者といえる。日本人のみがその恩恵に浴したのである。」（「日本における神経学研究の歴史」）と、陶烈の脳研究を高く評価している。

（平成25年6月例会）